

## 待ったなし 「水族館の2020年問題」

「水族館の2020年問題」を目前に控え、新たな水族館の建設計画や既存施設の対応策に関心が集まっている。神奈川県内では、商業ビルの大規模改装や遊園地の拡張に伴い水族館の新規開業計画が浮上。既存施設は「多店舗化、や異業種とのコラボレーション、新技術の導入などにより経営の効率化や顧客満足度の向上を図っている。

国内には120館を越す水族館があり、うち日本動物園水族館協会(JAZA)に加盟している「大どころ」は60館。多くの水族館がレジャーブームの追い風を受けて1980年代から90年代前半に新設・改修され、30年とされる「寿命」を迎えて膨大な建て替え費用の負担を迫られている。これが「水族館の2020年問題」だ。

費用対効果を勘案して閉館する水族館もあるが、「乱世こそ商機」と見て、新規開業計画も浮上。鳴門の渦潮などを再現した、四国最大級の「四国水族館」(20年3月開業予定、香川県)、リアルとバーチャルの融合をコンセプトに、最新の映像技術を駆使した「DMMかりゆし水族館」(20年4月同、沖縄県)などの建設が進んでいる。

神奈川県内では、大規模改装中のJR川崎駅東口の商業ビル「川崎ルフロン」(川崎市川崎区)に水族館の誘致が決まった。同ビルは地下2階、地上10階、店舗面積約4万2,500平方メートル。水族館はアクア・ライブ・インベストメント(本社・東京)が20年夏、9～10階に開業する。既存商業施設の改装では、初の試みだという。

川崎市多摩区と東京都稲城市にまたがるエリアで遊園地を運営する「よみうりランド」は、今年2月に発表した「スーパー遊園地」を目指す10ヵ年成長戦略の中で「アート水族館」の開業計画を明らかにした。「美術館のようなアート性を強調し、最先端の技術を使って異次元の体感ができる施設」をコンセプトとしている。

一方、昨年5月に開業25周年を迎えた横浜・八景島シーパラダイス(横浜市金沢区)は、ドルフィンファンタジー(04年開業)、ふれあいラグーン(07年同)などの新施設を相次いでオープン。マクセルアクアパーク品川(東



「アクアシャボン」とコラボし、集客イベントを開催した八景島シーパラダイス

京都港区)、仙台うみの杜水族館(宮城県)、上越市立水族博物館うみがたり(新潟県、管理業務請負)なども運営している。

八景島シーパラダイスは今年春、10周年を迎えたコストメブランド「アクアシャボン」とコラボして、ドルフィンファンタジーの館内を石けんの香りで満たすとともに、インスタ映えするフォトスポットを設置。新たな顧客を相互に開拓できそうな手応えを得て、約2ヵ月間のイベントを6月に終了した。

新江ノ島水族館(愛称・えのすい、藤沢市)は今年4月、開業15周年を迎えたが、前身の江の島水族館から数えると65周年になる日本の水族館の草分け。新会社になっても、地域色を前面に出した相模湾大水槽、深海魚やクラゲの飼育などの得意分野に力を入れるとともに、プロジェクションマッピングなどの新技術や夜間営業も他館に先駆けて取り入れてきた。

「えのすい」の立ち上げに金融面から参画したオリックス・グループは12年、京都水族館(京都市)、すみだ水族館(東京都墨田区)という人工海水を使った都市型水族館をほぼ同時期に開業した。自然教育とエンターテインメントを両立させた江の島水族館のDNAは、形を変えて「えのすい」とオリックスの水族館に引き継がれている。